

社会実装へ産学交流

東北工業大学
SDGs拠点

暑熱対策などシーズ発表

東北工業大学は2日、仙台市内の江陽グランドホテルで東北SDGs研究実践拠点産学連携交流会を開いた。写真。学内五つの研究実践拠点に紐付いた22プロジェクト研究のうち、各拠点を代表する研究所が産業施設の暑熱対策技術などの5シーズを発表することにも、地域連携による社会実装の加速に向けて産業界の参加者らと交流を深めた。

冒頭、あいさつに立った渡辺浩文学長は、今年度設定した同大のブランドスローガン「未来のエスキースを描く。」



について「試行錯誤しながら形にするプロセスを指し、研究実践拠点をはじめ、学生、教員の一人ひとりがより良い未来に向けて楽しく明るく取り組む心持ちを込めた」と説明した。続いて石井敏副学長兼建築学部長が研究実践拠点の概要を解説した上で「これまで多くの方々とともに歩んできたが、今後も皆さんと交流、つながりを持ちながら取り組みを進めていきたい」と語った。

研究実践拠点は地域に密着した工学系大学としての強みを生かし、東北地方特有の地域・社会特性を踏まえたSD

Gs（持続可能な開発目標）に向けて2018年度に創設した。「気候危機・対策技術」「Society5.0」

「防災・減災技術」「医工学・健康福祉」「地域・地場産業振興」の五つのコアテーマを研究する拠点と、現在は22のプロジェクト研究所で構成。いずれも地域のニーズを取り入れつつ、企業などと連携しながら研究・実践・発信に取り組んでいる。

発表された五つのシーズのうち、気候危機・対策技術研究拠点環境研究所の大石洋之建築学部建築学科准教授は「産業施設における暑熱対策のための熱環境実測とシミュレーション技術」を紹介した。大石准教授は同研究所の達成目標は「採光や通風、室温などのさまざまな要素からなる物理的・心理的に快適に過ごせる環境をつくることだ」と報告。鉄道系組織設計事務所勤務時代に半屋外が多い駅

舎の夏季温熱環境改善などに取り組んだ経験を生かし、「建築分野で脱炭素化に貢献する技術の研究を行っている」と言う。

具体的には、建築物が快適な空間を構築する場合、「計

画・設計上のパッシブな工夫と、効率の良い機械設備を設けるアクティブな二つの方法がある」との考えから、定量的な裏付けを持って最小のエネルギー利用で最適な建築環境の創出を目指している。

このため、シーズは「通風の熱環境の解析や実測、課題が抽出できる建物や、シミュレーションを経てケーススタディーによる環境の改善検討ができる室内空間を求めている」と呼び掛けた。

